

萩谷 巖 「マダムX」

(会員)

秋山功  
伊藤英一  
伊東總吉  
薄井良昭  
宇都宮義文  
佐々木征  
佐藤裕幸  
杉野和夫  
鈴木忠男  
鈴木正道  
中井嘉文  
野口勉  
福井豊  
堀良慶  
和田孝明

(ゲスト)

和田幸子

(敬称略・50音順)

NPO法人あーと・わの会 通称：「わの会」

## 第44回放談会



2016年1月11日(月・祝日) 13時～16時  
於 東京・京橋区民会館 洋室4号室



## 第44 回放談会

1. 日時 2016年1月11日(月・祝日) 13時~16時
2. 場所 東京・京橋区民会館 洋室4号室
3. 出席者(計16名、敬称略、50音順)  
＜会員＞秋山功、伊藤英一、伊東總吉、薄井良昭、宇都宮義文、佐々木征、佐藤裕幸  
杉野和夫、鈴木忠男、鈴木正道、中井嘉文、野口勉、福井豊、堀良慶、和田孝明  
＜ゲスト＞和田幸子
4. 司会進行：佐藤裕幸、 書記：鈴木忠男、 写真・編集制作：野口勉
5. 放談会(発表順)

### ① 野口勉



恵俊彦(いさお・としひこ) (1935年生)  
「欅と太陽」 油彩・キャンバス F15号 制作：1970年代

武蔵野風景を一貫して描き続けた画家が自然の尊さを40数年前から世に警鐘していた事実を知らなければならない。失われゆく武蔵野風景を「農耕によって作られた自然であることに特別の愛着を感じる」と画家は言う。作品は手前に畑と荒地、後方に屋敷守といわれる防風林がそびえ一軒の農家がひっそりとうづくまり、葉を落とした欅の大木が扇状の梢を空高く突き出している。背景は朝陽が空一面を真っ赤に染め武蔵野たる情感を醸し出している。今やこうした武蔵野の面影は西東京と埼玉西部のごく一部に残るのみとなってしまった。現実の武蔵野風景のほとんどは消えてしまった。そうしたことから恵俊彦の作品は貴重な資料として後世へ継承する意味があると思う。

＜談＞野口：歌川国芳のコレクターとしても知られる恵俊彦のコレクション200点が練馬区立美術館で2月19日から4月10日まで「国芳イズム・恵俊彦コレクション」展として開催され、恵の油彩画(武蔵野風景)10点も併せて展示されます。

## ② 福井豊



恵俊彦（いさお・としひこ）（1935年生）

「桑畑の雪」水彩・紙 26×36cm 「快晴むさしの」水彩・紙 37×26cm

共に1980年前後の作か？ わの会展や放談会に出品されたこの画家の大コレクター野口氏の影響により画家を知り近年入手した小品。現存画家作品入手は小生としては例外。

1958年武蔵野美術学校洋画科卒。1970年日本橋画廊初個展。

1983年風土会会員。2010年河鍋暁斎記念美術館個展。

武蔵野風景を描く画家として知られる。

京都造形芸術大学付属康耀堂美術館が作品多数収蔵。浮世絵研究解説者としても著名。

<談>野口：水墨のように描く水彩は個展で人気を博しています。

## ③ 宇都宮義文



島村三七雄（1904～1978年）

「溶鉱・火花」コンテ・紙 35×23cm  
制作年：不詳（注：販売時の題名は「ガラス造り」）

私は農業機械メーカー勤務で終止。この作品で私は工場現場の溶鉱現場・溶接現場の火花、コークスの燃焼する匂い、切削油の匂い、モーター音を思い出す。何よりも親しかった仲間の顔々が浮かんでくる。

作家の他の作品は不知であるが、東京国立近代美術館所蔵作品目録（平成3年刊）に昭和16年頃の作品として「渡洋爆撃行（油彩130×195cm）」の大作が記載されている。機会があれば見てみたい。（余談）：石川寅治の同種作品に「渡洋爆撃、昭和16年作」があり、同様に近美に戦争記録画が収蔵されている。

大阪生、大正13年東京美術学校西洋画科入学、藤島武二教室に学ぶ。昭和4年渡仏、サロンドートンヌ入選、昭和11年帰国、昭和15年独立展出品・協会賞、昭和42年東京芸大教授、同年日本芸術院賞（講談社刊、近代日本美術事典より）



#### ④ 中井嘉文



桜井浜江 (1908～2007年)  
「花瓶」 油彩・キャンバス 6～8号 制作年：不詳

1908年山形市宮町生、1927年山形第一高等女学校卒業、上京、  
1928年から30年まで協会洋画研究所に学ぶ。  
1931年第14回二科展樗牛賞、1930年独立美術協会展に初回から入選、1934年東京杉並区阿佐ヶ谷に住む。太宰治、啓一雄、外村繁、高橋幸雄、緑川貢、井伏鱒二ら中央沿線に住む文化人の溜まり場となる。1939年三鷹市下連雀に転居、1940年夫の秋沢三郎と離婚、1947年三岸節子らと女流画家協会を設立  
1995年青梅市立美術館で「桜井浜江画集—65年の軌跡」開催、2008年山形美術館にて「生誕100年記念・桜井浜江展」開催、一宮市三岸節子記念美術館にて「生誕100年記念・桜井浜江展」開催

#### ⑤ 堀良慶



桜井浜江 (1908～2007年)  
「無題」 油彩・キャンバス 60.5×50cm 制作年：不詳

桜井浜江の絵は人間の魂の底を覗き込むような深淵な表現を一貫して探究し、具象の枠を越えた独自の表現に至る。桜井浜江談「心の底から盛り上がるもの 地の底から湧きあがる力 そんな作品にしたい」「どんな絵も魂を込めて描いています」「一本の線、一つの点にも厳しく、生命感あふれる絵を、生涯描きました」この無題の絵は樹や人体を描いた1950年後半以降に描かれたように思えます。色彩、筆致はフォーヴ調、構図はシュール風。画面一面に発生しているクラックの状態が第29回独立美術協会展に出品の「樹」(2)1961年作に少し類似。二つの作品には樹の中に人体の気配が存在しているようにも見えます。

\*時代はフォーヴに厳しかった。その反省の新しい課題に身を挺して闘ったのが、桜井さんの戦後だ。芸術家は孤独のうちに世界を拓いてゆく存在なのであろう。

## ⑥ 佐々木征



高野真美（たかの・しんび）（1900～1980年）  
「バラ図」 油彩・キャンバス 27.5×21.5cm 制作年：不詳

初期の写実からデフォルメと強烈な色彩のコントラストによる量感表現、そして晩年の豊かで柔和な色調による画面構成へと変化をみせるが、いずれも人間的な暖かみを持つのが特徴である。代表作：《ハルピンの新聞売》

山梨県東八代郡一宮町に生れる。本名「真平」、1922年日本美術学校卒業後、同校講師となり文展・帝展に作品を発表。文展無鑑査ならびに槐樹社、旺玄会、大潮会の審査員でもあった。昭和12年山梨美術協会創立会員。

〈談〉佐々木：蒐集ジャンルが彫刻、写真にも広がり200点くらいとなり、家中が置場になっています。美術館では寄贈は受けるが寄託は受けない。木彫発見の件、遺族（娘さんといっても90歳）と会うことになり書籍刊行のお手伝いをしました。宇都宮：山梨のハーブ園でこの名前を見た覚えがあります。

## ⑦ 伊藤英一



リャウソウ ポリス ヤコブレヴィッチ（1919～1994年）  
油彩・板 F8号 制作年：不詳

ロシア共和国人民芸術家、全ソ美術アカデミー正会員、レーピン賞  
1919年ビリャチャカサ村生れ、1941年オムスク市美術大学、1991年死去  
モンゴル、シリア、ドイツ、イタリア、カナダ、ポーランド、ハンガリー等で展覧会  
旧ソ連時代の国家最高芸術機関である芸術アカデミー正会員として活躍する。

\*芸術アカデミー会員189名（絵画部門89名）

〈談〉伊藤：月光荘が巨匠として取り扱った画家です。3点持っています。

## ⑧ 伊東總吉



野田哲也 「日記1971年10月16日」 木版3、シルクスクリーン3  
43.5×45cm 13/30 制作年：1971年

野田作品は白黒だけのものが多い。初期のものにはカラーもあって本作の黄土色の淡いソファセットは、背景の人物の白抜き（father, mother, sister, brotherの印字つき）の影絵とあいまって、なにか謎めいていて奥行きを感じさせる。作者は6月にドリットさんと結婚しているところから異国の夫人宅を訪れたときの記録かと思われる。カタログNO. 103（フジテレビギャラリー）、東京国立近代美術館収蔵（野田作品13点のうち）

<談>堀：夫人宅ではなく羽田空港の特別ルームです。「全作品1964-2015」カタログレゾネ刊行記念・新作展が4月にギャラリーゴトウ（銀座）で開催されます。

## ⑨ 杉野和夫



山本彪一（1912～1999年）「南仏風景」油彩・キャンバス F8号  
制作年：1993年

1935年早稲田大学商学部卒、猪熊弦一郎に師事、フランス留学、1943年文展初入選  
1947年光風会会員に推挙、1953年日展無鑑査、1955年日展委嘱（以降14年間）  
光風会入選多数、個展多数開催（日動画廊ほか）、1968年ヨーロッパへ遊学、以降度々  
渡欧、1977年仏芸術文化勲章パルム・コマンドゥール受賞

作家いわく「勲章の話はいろいろもらったけど、取りに行かなくてもくれたからもらっておいた。」  
画壇での地位には全く執着せずニュートンの絵の具と洋酒とピアノを愛した。晩年になるほどに色彩は鮮やかさを増した。没後も人気は絶えることがない。  
<談>杉野：昨年8月の交換会で12万円で購入しました。潮が引いて船底の塗装がフランス国旗であるのがシャれています。

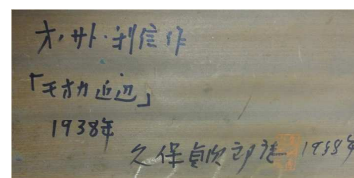


⑩ 和田孝明



オノサトトシノブ（1912～1986年）  
「モオカ近辺（真岡風景）」油彩・板 F4号 制作年：1938年

本名：小野里利信 1931年津田青楓洋画塾に入塾、1935年二科展に初入選、同年黒色洋画展を結成。この頃、久保貞次郎氏を知る。（栃木・真岡在住）  
1937年自由美術家協会創立に参加、1941年応召、戦後はシベリアに抑留される。  
1963年第7回日本国際美術展出品作「相似」は最優秀賞を受賞。  
ヴェネチア・ビエンナーレなど海外展への出品多数。  
没後1989年、1992年、2000年に回顧展が開催される。  
\*この作品は旧久保貞次郎コレクションです。  
（作品裏面に久保貞次郎署名（作者名・タイトル）が書かれている。）



<談>和田：久保は町田市立国際版画美術館の初代館長、その久保と懇意にしていた川越画廊で購入しました。

⑪ 鈴木忠男



（作品の一部を掲載）



（当時のポスターで作られたタトウ箱）

昭和春画（ワンセット、下絵および水彩画）作家名・題名：不詳 墨・水彩・紙  
約30×40cm、制作年：昭和20年代（推定）

骨董市で入手した春画。持参して良いか悩んだが...

昨年、永青文庫での「春画展」に21万人来場者あり。始めのコーナーの肉筆は大きさもあり見ることができたが版画類は一列目の背後から見たのでディテールは見えないままだった。

コレクションではエロ写真アルバム帳5冊ほど、肉筆本、版画本、（どれも昭和期か）あり。昔の春画写しの長い巻物も（歌麿）あるが探せず。（1月11日成人の日、性人の日か（笑））

<談>鈴木（忠）：「春画展」は京都でも開催される。細見美術館で2月から。

鈴木（正）：このような春画は花柳界で需要がありました。タトウ（ポスター）はレタリング字体、入場料から戦前（昭和10年代）ではないでしょうか。

⑫ 鈴木正道



相笠昌義（1939年生）銅版画集「女・時の過ぎゆくままに」1979年  
8集「公園にて」「うたたね」「はじらい」「舞妓座像図」「ねむる女」「微風」  
「髪を結う女」「晩年」

制作年は1979年前後、1979年文化庁芸術家在外研修員としてスペイン滞在。  
油彩、エッチングなどでいい作品を残している。1982年「カラバンチェロの昼  
さがり」で安井賞。私は今まで相笠作品を20点以上求めた。＜その動機＞駒井哲  
郎作品を本格的に求める予定であったが駒井氏は1976年死去、そこで細密な作  
品として相笠昌義氏の「ジャングルジム」（1977年か）をNギャラリーですす  
められたのが動機。以降、油彩小品、エッチング、リトグラフ、水彩を求めてきた  
が現在は経済的に購入不可。

⑬ 薄井良昭



黒沢信男（1930年生）「釧路湿原展望」 油彩・キャンバス F4号  
日動画廊シール付

1947年白日展入選、1952年日展入選、  
1953年東京芸大卒、1959年白日会会員推挙、  
1973年・1974年安井賞展入選、  
1979年白日会記念展内閣総理大臣賞、  
1992年日展特選、1996年白日展中沢賞、個展日動画廊他



主として風景画を描き続けた。このところの約30年間はひたすら雪景色を描き続  
ける。



⑭ 佐藤裕幸



萩谷巖 「マダムX」 油彩・キャンバス 仏M20号 制作年：1930年

萩谷巖の第2回目の滞欧作（サロンドートン又出品）  
エコールドパリの時代の香りのする戦前の代表作であると思われる。  
シャルル・グランの影響を受けた萩谷巖の実力が十分に理解できる貴重な婦人像。

<談>佐藤：この画家の作品は10点以上持っています。これに合う額縁を探しています。福井さんからいただいた「造形—特集・萩谷巖」（昭35，9号）にこの作品が掲載されています。

⑮ 秋山功



森幸夫（1950年生）

「津軽風景 一カッチョのある一」  
コンテ・紙 23×33cm 2012年作

「地の貌」油彩・キャンバス  
F4号 2015年作

「画家の良し悪しは、素描を見ればわかる」と言った人がいたが、初めて森幸夫さんの素描を見た時、その感を強くした。厳しい自然の姿や身近にある静物、裸婦像に至るまでどの作品にも清澄さが漂い、なんとも魅力に満ちて美しかったからだ。私にとっては素描画でも「ほしい」と思った希有な作家である。森さんは幼少期から軽い障害を持ち運動ができなかったという。その分、画を描くことで自分を支えてきたようだ。本名を「ゆきお」というが作品のサインは「さちお」と記している。作品を観た人が、みな幸せを感じてほしいという願いを込めているという。納得である。

古川弘画伯（水彩画）に師事。1990～99年東急日本橋店でガラス絵展。2011年梅野記念絵画館にて個展。



<梅野記念絵画館のリーフレット>

わの会の眼展 2016. 2. 16 ~ 3. 27

○放談会終了後、希望者7名で懇親会を実施しました。

○次回放談会は平成28年4月に実施予定です。

<編集後記>

私事で恐縮ですが例年通り1月は公私ともに新年行事が目白押しで土日のやり繰りに苦労します。今放談会も危うく欠席かと思われました。当日、賀詞交換会が2席入っていたのです。

仕事関連なので断る訳にもいかず午前中にあわただしく挨拶だけすませその関係者には不義理をしてしまいました。午後は急ぎ放談会へ駆けつけほっとしましたが。

何故にこれだけ放談会へ魅かれるものがあるのか真のところわかりません。

私の心が勝手にそうさせるのですから。

しかしあらためて本誌15作品いいものばかりで満足しています。素直にそう思います。(の)

発行	：	NPO法人あーと・わの会 (通称「わの会」)
発行日	：	平成28年1月吉日
編集	：	実行委員 佐藤裕幸(司会進行) 鈴木忠男(書記) 野口勉(写真・編集制作)
連絡先	：	事務局 〒277-0871 柏市若柴1-358 堀良慶 TEL 04-7134-8293 <a href="mailto:ryokeihori@yahoo.co.jp">ryokeihori@yahoo.co.jp</a>
発行部数	：	80部